

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 8 月 30 日現在

機関番号：22101

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22390424

研究課題名（和文） 性暴力被害者に対する急性期ケアの実践モデルの開発の研究

研究課題名（英文） Development of acute nursing care model for sexual assault victims

研究代表者

加納 尚美（KANO NAOMI）

茨城県立医療大学・保健医療学部・看護学科・教授

研究者番号：40202858

研究成果の概要（和文）：

本研究は、看護師が性暴力被害者に急性期看護ケアを提供する「実践モデル」を開発することを目的とした。郵送にて、200名の性暴力被害者支援看護師（SANE）に研究参加の可否尋ねた。その結果、SANEたちはSANE研修を肯定的にとらえ、様々な被害者支援の活動を行っているが、急性期対応の機会は少なかった。SANE同士のネットワークの強化、組織化、他職種との協働を築く必要がある。実態に基づく実践モデルが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The object was to develop an acute nursing care model for sexual assault victims. 200 SANEs were asked the right or wrong of study via mail.

As a result of questionnaire, SANEs thought SANE training program positively by themselves and perform activities of the victims. However, there were a few opportunity to have acute nursing care for victims. Future problems such as reinforce network among SANEs and collaboration with other professions became clear and organize SANEs. It was suggested that the future SANE practice model needed to develop based on the present situation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2011年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2012年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
年度			
総計	8,600,000	258,000	11,180,000

研究分野：医歯薬学・看護学

科研費の分科・細目：成人看護学

キーワード：性暴力・被害者支援・看護職・SANE・急性期看護・看護モデル

1. 研究開始当初の背景

米国での調査では、性暴力被害者は、最も心的外傷を発症しやすく、被害後の人生に与える影響が大きいことがわかっている。同時に、被害者は、事件後できるだけすみやかに、す

なわち急性期に適切なケアと各種サポートが得られることにより、心的外傷の発症率を軽減でき、回復へのプロセスを促進できることが報告されている。こうした被害者支援には、性暴力被害支援看護師（Sexual Assault

Nurse Examiner、以降 SANE と略す) による活動が海外では 注目されている。

日本でも、「NPO 法人女性の安全と健康のための支援教育センター (以降支援教育センターと略す)」において SANE の研修が行われている。しかし、具体的な「実践モデル」は確立しておらず、多くの SANE たちは実践に踏み出せないまま現場で悪戦苦闘している。

2. 研究の目的

本研究は、性暴力被害者に対して、看護師ができるだけ早期に適切かつ配慮ある看護ケアを提供するための「実践モデル」を開発することを目的としている。

そのために下記4つのプロジェクトを立ちあげ各々の目的をおいて研究計画が立案され、遂行される。

- (1) 国際的動向および海外の SANE 実践状況について情報収集をし、分析する。
- (2) 性暴力被害者支援看護に関する講座修了者 (SANE) の活動状況を明らかにする。
- (3) 性暴力被害者支援看護に関する講座修了者 (SANE) が必要とする現場での課題を明らかにする。
- (4) 性暴力被害者支援看護に関する研修修了者 (SANE) が、学んだことを実践につなげる研修プログラムを立案し、その学びの過程を明かにする。

以上の成果を踏まえて、「実践モデル」として統合し、提示する。

3. 研究方法

<情報収集>

資料作成および国内状況の把握

文献をもとに、SANE、SART 活動プログラム内容の検討および翻訳を行う。

次に SART に関する情報収集と役割遂行の実際に関する情報収集および現場視察として、SART および看護師研修が充実し SANE に関する法制化と SART を最も先進的に行っている米国の機関および関連施設を訪問し、SANE および SART 活動の実際、ミーティングの参加、教材、プログラム評価方法の資料収集を行う。また、専門家からの情報収集およびヒアリングを行う。

<調査>

調査(1)

研究方法：郵送によるアンケート調査。

調査の実施：支援教育センターの運営委員会から文書にてアンケート調査について承諾を得た後、同センターを通じて SANE 修了生に会員あての以下の送付を依頼する。会員情報については同センターの管理なので、研究グループは必要書類および返信封筒を準備し、事務局に依頼する。

調査(2)

面接調査：インタビューガイドを作成し、プレテストを実施する。プレテストの結果をもとにインタビューガイドを修正する。研究協力者は SANE10 名程度で 3-4 施設を見込んでいく。次により性暴力被害者支援に関わる SANE を含む医療関係者 (医師、ケースワーカー) に「研究協力のお願い」と「同意書」を配布してもらい依頼する。

調査(3)

アクションリサーチに基づく参与観察：SANE 自身が考える急性期の実践モデル構築のための活動プロジェクトを立ち上げ、調査者も参画し、そのミーティングを記録する。また、参加者にはポートフォリオを用いて学習経過を記録および自己評価してもらう。研修対象者は、調査(1)にて研究協力の意思表示を示した SANE で、関東圏内に在住する現在医療機関者で、5-6 名程度とする。

4. 研究成果

(1) SANE へアンケート調査

本研究では、NPO 支援教育センターの SANE 養成研修の社会貢献について評価するために、修了者に質問紙調査を依頼し、受講によって学べたことと現在の活動の実態を明らかにした。また、研修を改善するために、修了生に、現在の活動を踏まえさらにどのような内容の研修が必要かについて調査を行った。

対象および研究方法

研究対象

支援教育センターの SANE 養成研修の 2000 年度開始時から 2012 年度までの修了者のうち、支援教育センターから連絡が可能で、なおかつ研究の説明と協力依頼を受けたのち、協力に同意したものとした。

研究期間

2012 年 7 月 1 日～2013 年 3 月 5 日とした。

研究方法

デザインは、無記名の自記式質問紙調査であり、郵送法による回収とした。質問紙の内容としては、SANE 養成研修を受ける前後の対応経験、SANE 養成研修の目的それぞれについての理解、現在の活動内容、実践への学びの反映、研修後の変化、SANE 養成研修にさらに追加して欲しい内容、SANE としての今後の活動課題などとした。また基礎情報として、年代、現在の職種、活動地域、SANE を知ったきっかけなどを尋ねるものとした。

研究手順

養成研修を主催している支援教育センターに、SANE 研修講座を修了した会員宛てに研究の案内が来ていることを知らせてもらう

依頼をした。その案内には、協力の意思がある方、あるいは研究に興味がある方は各自で研究依頼書の発送希望書に発送先を記入し研究代表者に送付して欲しい由記載してもらった。かかる経費については、研究者が負担した。

支援教育センターが連絡可能であった数は200件であった。そのうち研究代表者に研究依頼書の発送先の連絡があった修了者宛てに研究依頼書、同意書、質問紙、返信用封筒を発送した。

回答を返送することで、調査協力に同意したものと判断し、データとして用いることとした。

分析方法

実態を示すため、数値化できるものは度数分布などの記述統計を用いた。また活動内容についての自由記載については、活動環境の種類で分類しまとめた。課題については類似した内容ごとにまとめた。

倫理的配慮

倫理的配慮としては、個人情報については無記名調査にすることで情報連結不可能な状態とすること、本研究にのみデータを用いること、調査に答えることによる時間的負担があること、途中で辞めてもよいこと、中断による不利益がないこと、などを説明した書面を同封し、回答の返却を持って同意とみなすことを明記した。

また、茨城県立医療大学の倫理審査委員会で審査を受け承認された。

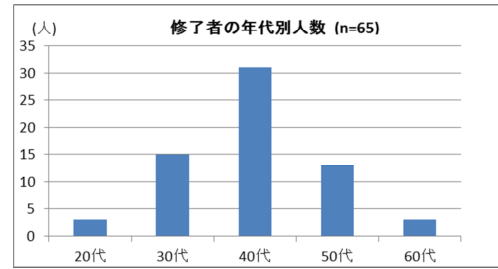
結果

研究依頼書発送のための宛先の連絡があった修了者200人に研究依頼のための説明書、同意書、返信用封筒(同意書返信用と無記名回答用の2通)を同封し、発送した。その結果、68人からの回答があった。記載のない項目がある回答もあったが、本研究では前後の対応数の比較のみ、対応のないものを除いて分析したが、それ以外は記載のある全データを利用した。ゆえに、対象者数は調査項目ごとに若干異なる。

対象

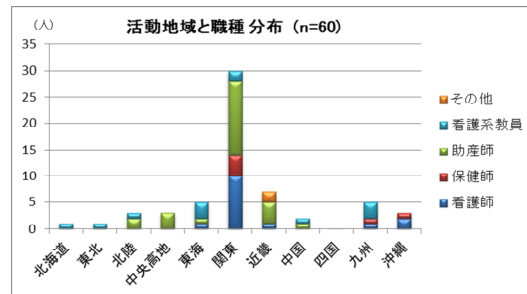
年代

回答のあった65人の年代別人数の分布は図のようになった。40代の31人を中心に前後の年代の修了者が回答を寄せていた。



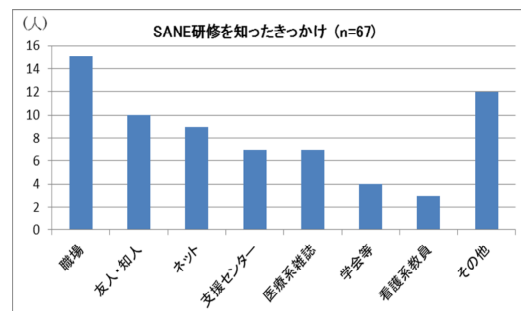
修了者の活動地域と職種分布

対象者68人のうち活動地域の回答があったのは60人であった。最も多い地区は関東で30人であり、全体の半数であった。次に近畿地区が7人で、東海地区と九州地区がそれに続き5人であった。四国地区はゼロ人であった。回答者の職種は全体で、看護師15人、助産師25人、保健師6人、看護系教員12人、その他2人であった。



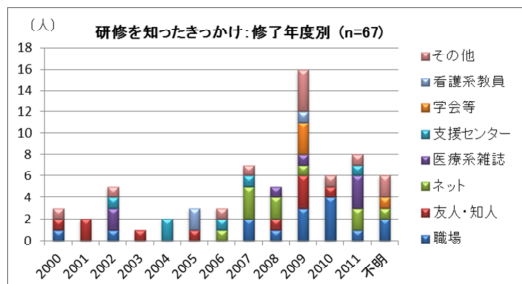
SANE 養成研修を知ったきっかけ

回答者68人中67人がきっかけについて回答をしていた。最も多かった回答は上司や同僚など職場関係者から聞いたというものであり、15人であった。次に友人・知人から、インターネットで関連事項を調べていて、支援教育センターのチラシをみて、医療系の雑誌で、学会等での発表で、看護系教員に聞いた、の順に多かった。その他に○をつけた回答者は12人いたが、情報先としては、CAP スペシャリスト養成講座で知った、YMCA 性暴力被害者企画の参加者から聞いた、地元NPO活動の中で知った、シェルターの知り合いから聞いた、看護師就職用雑誌に情報があつた、DV関係の本に載っていた、などの他、アメリカでの活動でSANEを把握していたという回答もあった。



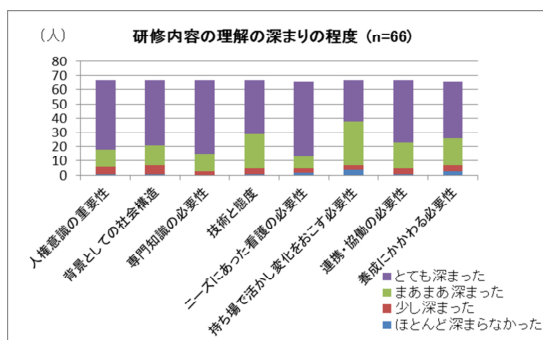
けの種類をみた。SANE 養成研修は、2000 年度から始まっているが、初回こそ受講者が多かったものの、その後 2005 年度までは、定員枠である 20～25 名を下回る年が続いていた。しかしながら 2006 年度以降、受講希望者が急に増加した。そのため、修了期ごとに分析してみた。

その結果 2006 年度修了者の回答に、ネットで知ったという項目が初めて出てきた。職場の上司や同僚から、あるいは友人・知人から聞いたという項目は最初の年からあり、口コミで情報が広がっていったことがわかった。また学会や雑誌での紹介もきっかけとなっていた。



研修内容の理解の程度

研修には目的があり、それらの理解の深まりの程度をどう自己評価しているのかを「とても深まった」「まあまあ深まった」「少し深まった」「ほとんど深まらなかった」の 4 段階で尋ねた。結果的には、人権意識の重要性や専門知識の必要性については 7 割以上の修了者がとても理解が深まったと回答していた。持ち場で活かし変化を起こす必要性という内容や技術と態度については、とても理解が深まったものの割合が低かった。しかしながら、どの研修内容も「とても」と「まあまあ」の回答者を合わせると 9 割以上となった。

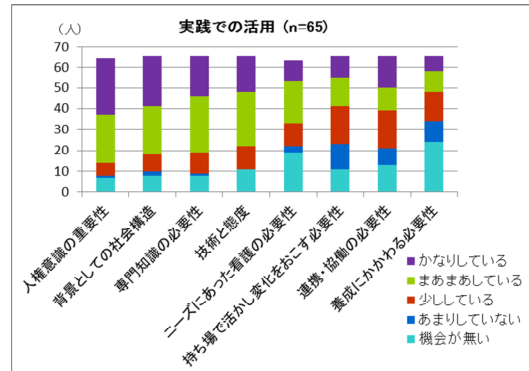


研修内容の実践への活用

次に、それら研修で理解が深まったことについてどれだけ実践に反映させられているかについて尋ねた。

その結果、「実践の機会が無い」と回答した修了生が、どの項目でも少なくとも 1 割程度いた。機会が無いと回答された人数が多かった項目は、ニーズに合った看護の必要性、

養成にかかわる必要性であり、これらから当事者に直接的に関わる機会や養成の場に立つ機会が少ない場にいる修了者が少なからずいることがわかった。しかしながら、「かなりしている」と「まあまあしている」を合わせると、人権意識の重要性や社会構造、専門知識の必要性、技術と態度については実践に活かしていると回答したものが 7 割以上となっており、職種や立場等に左右されず活かされているものもあることがわかった。



研修を受講して変わったこと

研修を受けたことで、自分の中で変わったことについて複数回答で尋ねた。その結果、「(性暴力に関して) より多くのものが見えるようになった」に 39 人、「(自分の対応に) 自信がついた」に 19 人、「(被害者を) 発見できるようになった」に 16 人、「(性暴力に関して) 話せる仲間が増えた」に 15 人が回答していた。

SANE 修了者としての活動と課題

最後に、SANE 養成研修修了後の活動内容と、活動をするにあたって課題だと考えていることについて自由記載してもらった。

活動内容

自由記載の内容を、活動の場ごとに分類し、【教育・啓蒙機関】、【医療機関(チーム)】、【地域保健機関】、【電話相談】、【個人として】というカテゴリが得られた。

課題

活動の障害になるものという視点で自由記載をみてみると、「SANE が少ない」「SANE の活動の場がない」「SANE 同士のネットワークができていない」「産科医の認知度が低い」「現場が SANE の必要性を感じていない」「SANE を必要としているところへのアクセスの仕方がわからない」「教育の不備で医療者が二次被害を与えるリスクが高い」「法的知識の不足」「証拠をどう取れば有効かわからない」「ケアのゴールが見えず支援の評価ができない」「地方ではフォローアップも難しい」という内容に集約できた。またそれら

の問題点の解決法と考えられる意見を課題として<SANEを増やす・認知度を上げる>、<法的・社会的にSANEが活動できる体制を作る>、<ネットワーク作りの必要性>、<現任教育の必要性>、<法律を知る>、<証拠採取の技術を高める>、<カウンセリング技術を身につける>、<地方にも活動の場を広げる>が挙げられた。

結論

研修修了生は、自分の持ち場で教育・啓蒙、施設でのチームとしての対応や電話相談などの直接支援活動などさまざまな活動をしていた。利用者の調査をしていないので支援内容の評価はできないが、少なくとも専門的な知識をもった看護職が確実に増えているということは、対応の改善や社会変革へ少なからずよい影響を及ぼしていると考えられる。

また支援教育センターによると毎年研修受講の応募人数は増加しており、被害者によりよい支援をと考える看護職が増えてきていることがわかる。そのようなニーズの増加も踏まえ、やはり、今、修了生に求められているのは、それぞれの持ち場での直接的な支援活動だけでなく、他職種と連携し各地でプログラムを開発することなのではないだろうか。また、そのためには修了生同士の協力が不可欠であり、被害者へのよいケアはすべての患者にとってよいケアにつながるという信念をもった修了生が有機的に動けるネットワークを作っていくことが活動の促進につながると考える。

(2) SANE および関係者への面接調査

(1)のアンケートにて面接の承諾を得た12名に面接調査を行った。尚、アクティブリサーチへの希望が1名のみであった。

修了生たちは、NPOに依頼され、相談業務、大学院で司法看護の科目を立ち上げ、専門相談の設置、同行支援等幅広い活動を続けている。また、支援センター立ち上げや地域での性教育プログラム作成、支援員のマニュアル作成等、支援の枠組み作りのコアメンバーになっていた。

被害者支援における問題点と課題としては、資金の調達、人材養成、他の職種との協働のバランスについて提起された。今後、SANEで継続的なスキルアップの場の必要性、SANEの講義や研修の質向上を行う必要性を述べていた。

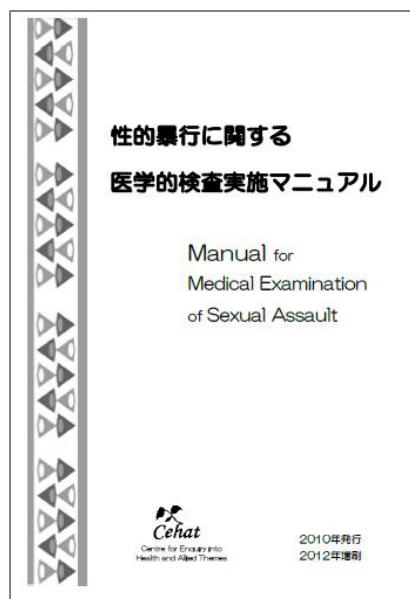
1名のアクションリサーチ参加者は、SANEが被害者支援を行っている施設での研修によりSANEとしての自信が強化された。

まとめ：

SANE および関係者として多様な活動状況がわかった。SANEがさらに積極的に実践に携われるようにするためには、研修の充実に加え、各機関でのSANEの役割作り、マニュアル作り等、これらを組織的に行うシステムの必要性が浮かび上がってきた。

これらの活動例、海外の活動例を基盤にして、日本におけるSANEの実践モデルを発展させる必要性が示唆された。

(3) 性的暴行に関する医学的検査マニュアル (表紙：総頁数52ページ)の翻訳



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ① 家吉望み、性暴力被害者に対する医療機関の対応に関する実態調査、母性衛生、査読有、53(3)、2012、pp.222
- ② 米山奈奈子、WHO アルコール世界戦略と日本の現状から、アルコール関連問題基本法(仮称)の実現へ アルコール医療過疎力の報告、日本アルコール関連問題学会雑誌、査読有、14(1)、2012、pp.772-779
- ③ 加納尚美、性暴力被害者支援看護師(SANE)の役割と課題、東京都病院協会会報、査読無、188、2012、pp.1-4
- ④ 加納尚美、修士課程における看護倫理に関する教育、茨城県立医療大学紀要、査読有、18、2013、pp.81-87
- ⑤ 加納尚美、妊産婦の健康に及ぼす暴力被害の影響、助産雑誌、査読有、64(9)、2010、pp.802-808
- ⑥ 三隅順子、DV被害を受けた女性に助産師としてできること、助産雑誌、査読有、64(9)、

2010、pp.788-793

- ⑦高瀬泉、法医学からみた DV、助産雑誌、査読有、64(9)、2010、pp.778-782
- ⑧高瀬泉、劉金耀、藤宮龍也、専門証言のあり方と研修の必要性－性暴力・性虐待事例をふまえて、日本法医学雑誌、査読有、64(9)、2010、pp.90
- ⑨米山奈奈子、対象に合わせて担う看護職の役割－地域における役割と活動 アディクション患者・家族へのケアの実際と看護職の役割、病院・地域精神医学、査読有、52(3)、2010、pp.240-241
- ⑩ Takase I, Yamamoto Y, Yamasaki S, Histological and Immunohistochemical investigation of live birth in a submerged neonate using blood-group antigens, Acta Crime Japon 76, 2010, pp.1-6

[学会発表] (計 4 件)

- ① Sugimoto K, The role of social support in the relationship between posttraumatic stress and postpartum depression symptomatology among Japanese women, 37th Annual Research Conference of Midwest Nursing Research Society in Chicago (招待講演)、2013.03.07-03.10、Chicago
- ② 高瀬泉、劉金耀、藤宮龍也、専門家証言のあり方と研修の必要性－性暴力・性虐待事例をふまえて、第 94 次日本法医学会学術全国集会、2010 年 6 月、東京
- ③ 高瀬泉、劉金耀、藤宮龍也、児童虐待および性犯罪被害者への対応にみる問題点と今後の展望、第 27 回学術中四国地方集会、2010 年 10 月、徳島市
- ④ 家吉望み、加納尚美、阿部正子、医療現場で看護師が行うドメスティック・バイオレンス被害者への支援プロセス、第 30 回日本看護科学学会、2010 年 12 月、札幌市

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他] なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加納 尚美 (KANO NAOMI)

茨城県立医療大学・保健医療学部・看護学

科・教授

研究者番号：40202858

(2) 研究分担者

家吉 望み (IEYOSHI NOZOMI)

東京有明医療大学・看護学部・助教

研究者番号：00582248

山田 典子 (YAMADA NORIKO)

札幌市立大学・看護学部・准教授

研究者番号：10320863

米山 奈々子 (YONEYAMA NANAKO)

秋田大学・医学 (系) 研究科 (研究院)・

教授

研究者番号：20276877

高瀬 泉 (TAKASE IZUMI)

山口大学・医学 (系) 研究科 (研究院)・

講師

研究者番号：30351406

三隅 順子 (MISUMI JUNKO)

東京医科歯科大学・その他の研究科・

講師

研究者番号：80282755